



東久留米の近代史シリーズ5

武蔵野鉄道東久留米駅（6）

東久留米駅の誕生・4

東久留米駅が開業した1915年（大正4年）4月の列車運行数は1日上下線各7本でしたが、同じ年の9月に改正され8本となりました。池袋駅の始発は6時23分で、最終が20時54分、終点の飯能駅まで約1時間50分の所要時間でした。東久留米駅の始発は上り6時9分、最終20時39分、下り始発は7時9分、最終は21時40分で、池袋駅まで45分、飯能駅まで約1時間かかりました。

開業時は乗車人数も少なく、武蔵野鉄道全線で1日1,000人をやや超える程度でしたが、次第に増加し、大正14年には3,800人になっています。ただ、当初の12駅、大正11年の16駅から単純計算すれば、一駅あたりの1日乗車数は100人～240人であり、東久留米駅はそれを下回っていたことが推測されます。このように、鉄道を利用する人は少なかったものの、地域経済の推進役として貨物を運ぶという役割も担っていました。1927年（昭和2年）末には、44両の電車・客車に対して112両の貨車があり、初期の電車の中には車両の半分を貨物用に充てていたものもあったことから、貨物輸送の比重が高かったことを示しています。

当時の鉄道によって運び出されるものは、ほとんどが農作物でした。特に小麦は鶴見の日清製粉や川崎の日本製粉へ出荷する村の主要な産物でした。それまでは、荷車や荷馬車で川越鉄道の駅がある東村山などへ運んでいたのが、直接武蔵野鉄道で出荷できることになりました。また、野菜等も神田や高田馬場へ荷車等で引いていったのが、鉄道を利用することによって、出荷範囲も広がり、後には大阪市場への牛蒡の出荷や、甲府、岡谷などへも漬物の原料となる干大根を一冬に100両ほども出荷するようになりました。鉄道を通して村に入荷するものは、日用雑貨、農機具類、大豆粕・化学肥料などの肥料が主なものでした。それまで、久留米村に残っていた自給自足的な経済のあり方が大きく変化し、商品経済への移行を武蔵野鉄道と東久留米駅の開業は促進したのです。

上り	下り
6:09	7:09
7:46	8:36
9:47	10:48
12:03	13:03
14:17	15:18
16:25	17:15
18:24	19:24
20:39	21:40

表1 東久留米駅の初期のダイヤ
大正4年8月・所沢市史『近代資料Ⅱ』より作成

西暦	年	人数
1915	大正4	1,022
1916	大正5	1,261
1917	大正6	1,602
1918	大正7	1,657
1919	大正8	2,278
1920	大正9	2,492
1921	大正10	3,164
1922	大正11	3,820

表2 武蔵野鉄道の1日の乗車数
『東京市郊外に於ける交通機関の発達と人口の増加』東京市・昭和3年より作成

また、隣の田無町駅（現ひばりヶ丘駅）や清瀬駅の開設が1924年（大正13年）で、東久留米駅より遅かったこともあり、新座や清瀬方面からの利用客も集めて、駅前には運送屋、肥料屋、お茶屋、料理屋、下駄屋などの商店が建ちはじめました。



写真1 富士山を望む駅

1953年（昭和28年）杉山繁雄撮影
駅のホームからは西に富士山がよく見えます。



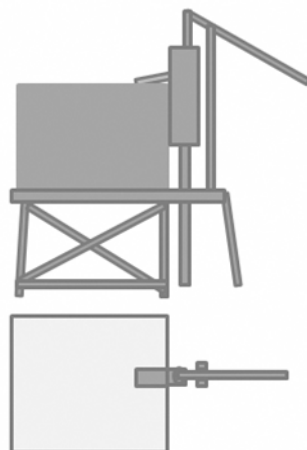
写真2 駅前の神藤倉庫

1967年（昭和42年）古川武雄撮影
駅前には貨物運搬用の倉庫も作られました。

蒸気機関車給水塔

東久留米駅は武蔵野鉄道全線の間地点にあったため、蒸気機関車の給水を行う駅でした。給水塔は池袋側踏切から30mほど駅よりの貨物引き込み線（待避線）わきにあり、櫓の上に6～7尺角の方形水槽と木製の汲み上げポンプが付いていました。この地域は湧き水の多い所なので、水はポンプで井戸から汲み上げていました。水槽からホースが伸びており、機関車の水入れ口につなぎ、紐を引くと弁が開いて給水したのです。

蒸気機関車が停車すると、やぐら上の水槽からズック（粗い麻布）のホースが降ろされます。ポンプを操作するのは落合村の立野に住んでいた細田弥太郎さんでした。「手押しポンプのヤーさん」と親しまれていました。ポンプ仕事をするために落合村から駅前に近い門前村に移り住みました。いつも大きい懐中時計を腰に下げ、春夏秋冬一年中休むことなく仕事に励みました。すばらしい秀峰富士の展望も最初のうちだけで、春の武蔵野特有の砂嵐は容赦もない、梅雨もすぎれば炎天、爽やかな秋も足早やでした。一面の麦畑から吹き上げる風に、体が飛ばされそうな日もいつものことです。昔は久留米村も雪が多く、何年か経つと風雪に耐えてきたタンクも水漏れが激しく、ポタリ・ポタリと櫓から水が線路に落ちるようになりました。鉄道会社がなかなか修繕補強をしてくれないので、東久留米駅誘致の立役者である神藤庄太郎さんが見ぬふりも出来ず、乗り出したといいます。



蒸気機関車給水塔

東久留米市は武蔵野台地有数の湧き水地帯で、地下水が豊富なため井戸も比較的容易に設備ができました。給水塔に関する記述は西川竹三、細田藤七、野島愛雄氏の聞き取り調査によるものです。左の絵は野島愛雄氏作画。水槽模式図は駅の西側に住んでいた西川竹三氏のご教示により筆者作成。

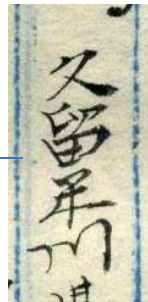
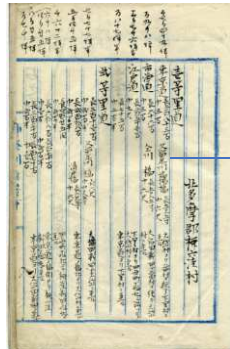
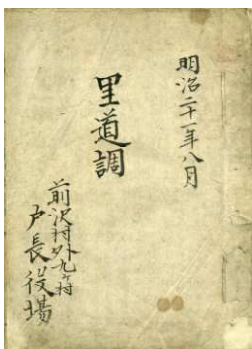
駅物語余話

東久留米駅・名称の由来

東久留米駅は武蔵野鉄道開業時に付けられた駅名ですが、その由来については定かではありません。当時、駅のある場所の自治体名は「久留米村」でした。普通なら「久留米駅」にするのが一般的なのでしょうが、久留米駅はすでに九州の福岡県に1890年（明治23年）に九州鉄道の駅として開業していました（明治40年に帝国鉄道庁所管）。そのことから、福岡県の久留米駅と混同しないように東の久留米、あるいは東京の久留米という意味をこめて「東久留米駅」と命名したと考えられます。

現在の東久留米市は、1970年（昭和45年）10月1日に市制施行されましたが、その時は駅の命名の時とは逆に、今度は市名が「東久留米駅」から付けられたのです。東久留米市の行政域は、1889年（明治22年）4月1日に旧前沢村外九ヶ村が合併して「久留米村」として誕生したことに始まります。その後、1956年（昭和31年）8月1日に町制が施行されて「久留米町」となりました。市制施行の時に問題になったのがやはり市の名称でした。町民1,000人のアンケートでは、「久留米市」が47%、「別の市名を考える」が36%、「どちらともいえない」が17%と、約半数がそのまま久留米町→久留米市を希望したのです。それではなぜ「久留米市」にならなかったのでしょうか。その理由がやはり福岡県久留米市の存在なのです。市制施行の年の3月12日に当時の自治省事務次官から一つの通知が出されました。その内容は「新たな市となる普通地方公共団体の名称については、既存の市の名称と同一となり又は類似することとならないよう十分配慮すること」というものでした。簡単に言えば、「同じ市名は好ましくない」というものです。市制施行の7か月前であり、当然自治省とも調整が行われましたが、最終的にさまざまな意見を参考として町議会の市制施行特別委員会で決定されたのが「東久留米市」だったのです。1915年（大正4年）に武蔵野鉄道（現西武池袋線）が開業した時にできた「東久留米駅」も福岡県の久留米駅と混同しないように名付けられた経緯はありますが、市制施行時にはすでに55年も親しまれた名称であり、「久留米」という文字も残ったことから、市民にはほぼ抵抗なく受け入れられたようです。「東久留米」は、駅名と合わせれば百年以上の歴史ある名称ともいえるのです。

それでは、「久留米」という名称そのものは何に由来しているのでしょうか。これも九州の久留米と関係があるのでしょうか。結論からいうと直接の関係はありません。もともとの「久留米村」の名称は、市内を東西に流れる黒目川から付けられたものなのです。黒目川は、江戸時代から明治時代にかけて「久留目川」「来目川」や「久留米川」などと呼ばれていました。明治22年に付けられた村の名前はこの「久留米川」に由来していると考えられています。それを推定できる公文書『里道調』も確認されています。東久留米市は湧き水と川のまちであり、東久留米駅にもその意味が込められているといえるのではないのでしょうか。



里道調

明治21年8月

東久留米市指定文化財・東久留米市郷土資料室所蔵・市近代歴史文書101

現在の黒目川が久留米川と表記されています。江戸時代も久留目川・来目川・黒目川などと記されていました。

文責・山崎 文（東久留米市文化財保護審議会委員）

東京文化財ウィーク Tokyo Heritage Week2023

10月1日から11月30日にかけて、都内各地の文化財の公開が行われる「東京文化財ウィーク2023」が開催されます。東久留米市内でも関連する事業が行われます。

文化財企画事業

開催期間：10月1日（日）～11月30日（木）

●東京都指定史跡「新山遺跡」（下里3-21、下里中学校校庭北側道路）

縄文時代の柄鏡形住居跡の復元住居跡が見学できます。

●東京都指定史跡「下里本邑遺跡」（野火止3-4 下里第2住宅内）

下里本邑遺跡公園は、旧石器時代から平安時代と長い期間に亘り人々が生活していた場所で、生活の痕跡（遺構）がみつかった場所には説明板が設置してあります。また、遺跡調査で出土したものは、遺跡公園と公道を挟んで南側にある遺跡館にて、ご覧いただけます。

●市指定史跡「小山台遺跡」（小山1-10 小山台遺跡公園内）

旧石器時代、縄文時代、弥生時代の遺跡で、公園内には、中学生が発掘調査をした縄文時代の竪穴式住居跡が復元されています。

特別公開事業

◎「村野家住宅」顧想園（柳窪4-15-41） 秋の特別見学会

開催日 11月15日（水）午前10時～11時30分、午後1時～2時30分

12月2日（土）午前10時～11時30分、午後1時～2時30分

申込：事前申込が必要。定員各回50名、先着順。申込詳細は、下記までお問合せください。

問合先：㈱兼七 村野家住宅特別見学会係 042-344-6735

・江戸時代から明治期にかけての景観が残る柳窪にあり、平成23年に、主屋・離れ・土蔵3棟・薬医門・中雀門の7件が国の登録有形文化財となっています。同住宅は個人住宅であるため普段は見学できませんが、株式会社兼七が主催し、市教育委員会が協力して特別見学会を行います。また、英語での案内も可能ですのでお問い合わせください。



都指定史跡「新山遺跡」



市指定史跡「小山台遺跡」



国登録有形文化財「村野家住宅」（主屋）

編集・発行

東久留米市郷土資料室（東久留米市教育委員会生涯学習課文化財係）

203-0033

東京都東久留米市滝山4-3-14 東久留米市わくわく健康プラザ内

電話 042-472-0051

無断転載はしないでください